

第1群（活動報告）

精神障害者の支援者の資質向上に向けてー地域支援者が主体的・継続的に取り組んだ事例検討会ー

発表者(筆頭演者)所属・氏名 北部保健福祉事務所 技師 三浦詩織  
高橋みね, 遊佐亜希子, 前田知恵子, 逸見怜菜

キーワード: 苦手意識の軽減, 課題の共有, 支援者支援, 継続性

I はじめに

当圏域では「精神障害者地域移行・地域定着支援事業（平成 26 年度～）」を通して地域の現状を整理する中で、「地域支援者は精神障害者に対して苦手意識があり、積極的な相談や支援に取り組みにくい」という課題があることが明らかになり、その改善に向けた取組の必要性が認められた。

保健所としては、中長期的視点を持って、その取組を継続できる体制（社会資源＝事例検討の場）を構築する必要があると考えたことから、その必要性を地域支援者とともに確認し、地域支援者が主体性・継続性を持って関わることができる「ワーキング」を立ち上げ、支援者の資質向上のための「事例検討会」を実施した。今回は、そのプロセスと成果について報告する。

II 方法

平成 26 年度から 28 年度まで、当圏域で開催している「地域支援会議」において、精神障害者支援における課題と対策を共有し、29 年度には、支援者が抱える課題解決の一つとして多職種が参加する事例検討会に取り組むことを決定した。開催に向けては、地域への定着、継続した活動、関係者が主体的に考える場となるよう、地域支援者で構成するワーキングを具体的な検討組織として地域支援会議の下に設置した。

29 年度から 30 年度にかけて、ワーキングメンバーが中心となって多職種連携の事例検討会を 3 回開催した。毎回、メンバーが主体的に企画、運営、振り返りを行うという一連の過程を実施した。

III 活動内容

地域支援者が主体的に関われるよう、ワーキングにおいて、現場の困り事を明確にし、取組の目的を繰り返し共有しながら、地域で実施している取組の情報共有や圏域の支援者の特徴を踏まえ、参加しやすい場面設定も考慮して、事例検討会の方法を検討・企画した。また、今後も地域で継続されるよう、負担感が少ない運営方法や、事例提供者及び全体ファシリテーターを輪番制としたほか、保健所が中心となって、継続して活用できる全体ファシリテーターシナリオを作成した。

事例検討会の目的は、地域で困っている支援者（＝事例提供者）への還元が大きい「支援者支援」を重点とした。

ワーキングにおける課題共有から事例検討会実施までの一連の取組を通して、ワーキングメンバーが次の展開に主体的に意見を出すようになったほか、全体ファシリテーターについても、シナリオの作成により特定の機関に負担が偏らない方法を確立した。

課題である「精神障害者に対して抱く苦手意識」について、事例検討会参加者の半数以上が苦手意識の軽減を感じており、様々な「気づき」を得たとの声があった。さらには、ワーキングメンバーが共同で取り組む中で、方向性が共有でき、一体感も芽生えてきたことから、それぞれが意見を出し、自主的に関係者調整を行うなど、地域の支援者が主体的にこれらの取組を継続していくための新たな動きも出てきている。

IV 考察

地域支援者とともに、課題を整理し、現場で感じている声に基づいて丁寧に対策を検討し、精神障害者支援に対する苦手意識軽減に向けた PDCA を行ったことで、効果的な事例検討会の実施につながった。ワーキングにおいては、ともに悩みながら一つの目標に向けて企画、運営、振り返りといった PDCA を繰り返したことで、地域支援者が主体的・継続的に取り組む体制ができた。事例検討会とワーキングを両輪として PDCA を繰り返したことが、地域支援者の資質向上、継続的・主体的な取組につながったと思われる。

V おわりに

今後は、地域の支援者が主体的・継続的に取り組むための「条件」などについても、ワーキングで検討し、資質向上につながる事例検討会が継続され、更に定着できることを目指してゆきたい。